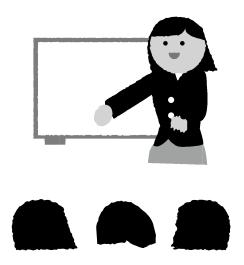
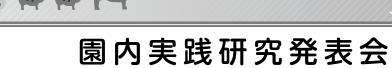
## 平成28年度



# 実践研究発表





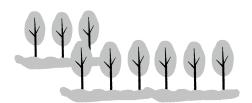




平成28年10月27日(木) 時 間:14:00~16:00

場 所:甲寿園 会議室

# プログラム



# 「行きたい場所へ行きたい」

#### ~その方に合った外出~

南館 2 階 援助員: 北野 奈津美/松垣 千佳子/和田 昂

**- 〈キーワード3つ〉**-

#### 【はじめに】

ある利用者様から、私達が計画した外出に対し「何故、こんな楽しくないところへ来ないとダメなの?」と厳しい言葉をもらい、ハッとさせられた経験がありました。そのことをきっかけに"利用者様が心から満足できる外出"をテーマに、今までの外出に対する職員の考え方や、実際に行ってきた外出を振り返ることにより、外出の在り方について見つめ直していければと思い取り組みました。

#### 【取り組み内容と対象】

始めに利用者様はどういう所へ行きたいと思われているのかを知る為に、職員は外出先を選ぶ際にどのような 事を考えていたのかアンケートを取りました。

そして、利用者様の声の中からいくつか取り上げ実際に計画を立て外出を行う事にしました。

#### 【結果】

- 二つの外出を計画し実施しました。
- I.外食に家族様と一緒に行っていただく計画:普段あまり表情を変えず召し上がることが多い方が、家族様と 一緒のせいか笑顔で「美味しい」と召し上がられていました。
- Ⅱ.気の合う利用者様同士で水族館へ行く計画:初めて見る生き物に大変喜ばれ「ありがとう」と満足された ご様子でした。

#### 【考察とまとめ】

今回の研究を通して「外出」の難しさと喜びを感じました。希望された場所へ行き、家族様や気の合う方と行かれる外出で見せる笑顔はとても輝いていて、職員として良い外出を提供出来たという喜びの一方で、日々の業務に追われてしまい我々職員のマンパワーだけでは限界があり、中々ご希望に沿えていないという現状もあります。利用者様一人一人の声を聞き"満足出来る外出"を提供していく為には、家族様にも積極的に参加して頂けるよう日時の調整を行うこと、日頃の面会時等から信頼関係を築く事等、小さな事から一つずつ始めていく事が大切ではないかと考えます。そして今回の研究で終わりではなく、これからも一つでも多く「心から満足出来る外出」を提供出来ればと思います。



## コミュニケーションロボットを用いての穏やかな暮らし・

南館 3 階 援助員: 吉野 茜 / 伊藤 尚一 / 谷澤 和歌子

-〈キーワード3つ〉-

コミュニケーションロボット

アニマルセラピー

穏やかな生活

#### 【はじめに】

不安感情により頻回に不穏な様子をみせられる利用者が、入所以前に自宅にて犬を飼育していたことを踏まえ、 当施設にて保有しているコミュニケーションロボット(以下、ロボット)を用いて心穏やかな生活を送っていた だけるかを検討。

#### 【取り組み内容と対象】

A 氏 91 歳女性、皮膚の状態が悪化し常に腕の痛みを訴えられている。痛みからの不安感情に伴い感情の 起伏が激しく、時折大声をあげて職員やご家族を呼ばれる。

5 ヶ月 (5 月~9月) 間、特に不穏の傾向がみられる 15:00 ~ 16:00 にロボットの提供を不定期に行う。

#### 【結果】

ロボットをお渡しすると笑顔がみられ、比較的穏やかに過ごされた。

- 5月:連れてくるとパッと破顔され、「可愛いわねぇ~!」「お名前はなぁに?」「そうなの。えらいねぇ」とロボットと会話をするように話され落ち着かれる。時折、「家で飼っていた犬にそっくりなの」と涙をこぼされていた。
- 6月:ロボットの名前をしっかりと覚えられ、笑顔みられる。
- 7月:1日~6日まで両側下腿浮腫のため入院。退院後は立位とれず皮膚状態も更に悪化していたため、 バルーン施行し退院・再入所されるもご本人は「トイレに行きたい」と頻回に訴えられる。 ロボットをお渡ししても、以前ほどの笑顔はみられず。
- 8月:ロボットをお渡しするも、職員がそばにいなければ理解されない様子。「こんな子、うちでは飼えないから引き取って」と拒否されるようになる。ベッド上でロボットをお渡しし、職員がそばを離れると「助けて!誰かが犬を置いていったの!」とナースコールを押すことが増える。
- 9月: ベッド上でロボットをお渡しせず、食堂にてふれあっていただく。 笑顔みられるが、職員が通ると「トイレに連れて行って」と頻回に訴えられる。

#### 【考察とまとめ】

入院される前の A 氏は、泣いて喜ばれるほどロボットに愛着を示していたが、現在は様態が悪化し、「今の自分では面倒をみきれない」と責任を重く感じ拒否をされるようになった。ロボットが効果的であるのは短時間であり、ふれあう利用者の様態によっても左右される。しかし、短時間であっても A 氏はもちろん他利用者、更に職員も「可愛い」と声を上げてふれあう場面が多く見られた。実際の動物を用いてのふれあいが難しい現場において、ロボットの存在は日々の生活(・業務)においてうるおいをもたらしている。







## 人が人として人とともに豊かに生ききる

#### ~ご利用者から教わった大切なこと~

北館 2 階 援助員: 井上 颯人/山下 直史/大平 幸佳

**-〈キーワード3つ〉**-

看取り 法人理念 町内会

#### 【はじめに】

「人が人として人とともに豊かに生きる」私たちの法人理念である。改めて、この法人理念について考える事にした。 私たちのフロアは園内で唯一、ロングのご利用者とショートのご利用者が一緒に生活をされている。平成 28 年 5月10日、ロングのあるご利用者(A様)が亡くなった。その方の「生ききった人生」に関わった事で、豊かに 生きる事の先にあるなにかを考えた。

#### 【取り組み内容と対象】

取り組み 1: A 様の死をきっかけにご家族と職員が A 様の想い出を振り返る。これを「グリーフケア」と言う。 フロア職員にはアンケートを記入してもらい、荷物を取りに来たご家族には、ここでの生活について のお話をして頂く。A 様は、8 年 8 か月この施設で生活され静かに最期を迎えられた。 看取りケアのひとつとして「わたしの掲示板」を作成し居室に飾った。これは、ご利用者やご家族・ 担当職員の想いを記入し、それらを含めた「こだわりの援助方法」をまとめた掲示板を作成。

取り組み 2:ロング・ショートのご利用者が集う場として第一日曜日の 14 時に「町内会」の実施。 職員を含み全員で今後の施設での生活の過ごし方の見直しと看取りへの不安を傾聴し話し合う。

#### 【結果】

取り組み1:アンケートの結果、想い出や看取りケアについて考える事で、職員が初心に戻り看取りや死に対して 改めて真剣に考える事が出来た。また、ご家族や他業種の方にもしっかり声掛けをし、全員で考え 見直していく事で次の看取りケアにも繋がっていく結果になった。

さらに想いを綴った掲示板を飾る事で、その方に関わる全ての人の意識の向上を行う事が出来た。

取り組み2:ご利用者ひとりひとりの生活や死の不安を少しずつであるが取り除く事が出来ているのではないか。 ご利用者の意見を私たちが受け止める事で、今後の生活の質の向上と看取りケアの取り組み方を 考える職員にもいい時間を過ごす事が出来た。

#### 【考察とまとめ】

人生の「やがて来る日」に備える事の大切さ、私たち職員にできる「いのち」を繋ぐ事の大切さを改めて感じ、学ばせて頂いた。繋ぐ事の大切さを多業種とも共有し、看取りのケアプランにも反映していきたい。この取り組みを通して『人が人として人とともに豊かに生ききる』という事は、決して簡単な事ではないと感じた。「豊かに生ききる」とご利用者・ご家族・職員が思う為には、全員が最期の時をどのように過ごしたいか・過ごして頂きたいかをもっと真剣に考え実行する事だと思う。いつか来る「最期」の日までをどのように過ごしたいかは、ご家族・ご利用者だけで考えるのではなく、事前に町内会のように全員が参加できる所で話し合い、職員も一緒に考えていきたい。最後に、生ききった先に穏やかな表情を見せて頂けるよう、これからもこの取り組みを大切にしていきたい。





# 喜びを感じながら、今を生きていく為に。

北館3階援助員: 渋谷ひとみ/中村日乃

- 〈キーワード3つ〉 -

理解 帰宅願望 穏やかな生活

#### 【はじめに】

今年の初めに一人の男性利用者が入所された。入所当時、「何故ここに入所したのか?」「こんなトコに連れて来られるなんて…だまされた!」と頻繁に職員に伝えて来られていた。

(どうすればこの方に園での生活を理解して頂けるのだろうか?)(どうすれば、穏やかな気持ちで生活して頂けるのだろうか?)この方の思いを理解し、より良い生活につなげていく為に取り組む事にした。

#### 【対象利用者】

利用者 M 氏 (男性・78 歳・要介護度 3) 7年前に妻を亡くされ、こどもは無く独居生活をされていた。身内は遠方の為音信不通である。同施設内のデイサービス・ショートステイの利用を経て平成 28 年 1 月甲寿園へ入所になる。

#### 【取り組み・課題】

振り返りも併せて課題収集を行い、フロア職員が思う[当時困っていたこと・現在の M 氏の変化]のアンケートを実施。課題3つ抽出①生活援助を拒まれる ②帰宅願望 ③物盗られ妄想

#### 【考察と今後の課題】

入所当時 M 氏との関わりを持つことに際し、まずは本人の現状理解とこれから施設での生活を送っていただく事への理解が必要であった。今まで自由に過ごされてきた生活が、ある日突然共同生活になったことで環境への順応に戸惑いを感じ、心理状況に大きく影響を与えたと考えられる。時間をかけて情報収集を行い、取り組みや課題を踏まえて、時間毎、タイミング毎の違いはあるが、少しずつ慣れや理解が進み、気持ちの変化に繋がっているのではないかと考えられる。入所させられたという被害的な想いから入浴を拒まれたり、物盗られ妄想に発展したのではないか?との考え方も切り離して考える事は出来ず、今後もそれらの訴えの根本にあるものが何かを探っていく必要もあると考えられる。

#### 【まとめ】

今回の取り組みを経て M 氏にとって、大好きなスポーツ、お酒等の話をして心の不安な時間を減らし今の生活が楽しいと思える時を過ごして頂ける環境を提供することが私たち職員の重要な関わり方だと感じた。 M 氏にとってかけがえのない家族を亡くし、不安を感じている中で、私たち職員がいかに関わらせていただくか…とても難しい課題であるが、今後生活を送って頂く中でとても重要な課題である。職員一人一人がきちんと向き合うことが課題解決の糸口となり、より精度の高い解決へと結びつけることが出来ると考える。今回の事例をきっかけに、利用者一人一人に穏やかな生活を提供できるような取り組みをすすめていきたい。







# 気軽!お手軽!音楽レク♪

#### 音楽レク研究チーム 援助員:

樋口 亜美/藤田 志穂/多胡 亜季/東山 未来/作業療法士:小田 浩美

- 〈キーワード3つ〉 -

音楽レク

気軽

職員の意識調査

#### 【はじめに】

今回、音楽療法士による職員向けの研修に参加し音楽レクリエーションを行う際の工夫を学んだ。日々の業務に追われレクリエーション(以下レク)の時間があまりとれていないこと、また職員の知識、技量に左右されることもあり、レクに対する苦手意識を持つ職員がいることが現状であった。研修を受けて、今実施しているレクの質をあげたり内容を広げたい、苦手な職員にも気軽に取り組んで貰いたい、業務に追われているので短時間で出来るレクを紹介したいと考え、他の職員も気軽に音楽レクが出来るよう実践と職員の意識調査を行った。

#### 【取り組み内容と対象】

対象は園内の職員で、レクを行うことのある各フロア、デイサービス、リハビリ室の職員。音楽レクを気軽に取り組んでもらうために、音楽レクに対する興味や意欲などに関する意識調査を実施。その結果から、道具があればやりやすい、アイデアがあればやりやすい、との意見が多くあったため、レクの具体例(盆踊りに向けての炭坑節の練習、絵本の読み聞かせ、口の体操など)や工夫を紹介し、実施する際の参考にしてもらった。その後、1回目からの意識変化をみるために、2回目の意識調査を実施した。

#### 【結果】

2回の意識調査の結果から、普段の業務でレクを行うことの多いデイサービスやリハビリ室の職員は、気軽に取り組める人数が多かった。職員全体としては興味や意欲に対する意識変化は大きくみられず、気軽に取り組める職員もいるが苦手や不安を持つ職員もいることに変わりはなかった。しかし、苦手意識を持つ職員も紹介したレクを取り組む様子があり、利用者自身からは「いつもの体操せんの?」「こないだやったやつやってー」という声を聞くことができた。

#### 【考察とまとめ】

意識調査と実施を通して、ただ「レクをしましょう」という呼びかけよりも、具体例や道具などの用意があるほうが 実施しやすい、引き出しが少なかった人が新しいことにチャレンジするきっかけになったのではないか、また 盆踊りに向けての練習を紹介したように、行事や季節などの目的に合わせたレクの提示をすることで、レクに対し 苦手意識のある職員も気軽に取り組めるのではないかと考える。今回は気軽にできることをテーマにレクを紹介 したが、レクを行う上での雰囲気作りや利用者が取り組みやすくするための工夫やその目的を職員に伝えきれて いなかった。今後もレクを紹介することを続け、工夫や目的も伝えていくことが必要である。

